犬山から舟が来た

明治19年から愛船㈱により、犬山と名古屋を結ぶ輸送が始まった。9月26日に開業式が犬山の木津用水元杁(取水口)前で行われた。河原に幕が張り回され、来賓200余名出席のもと、式典が執り行われている。

当時の県知事勝間田稔は開業式の祝辞のなかで「これまで桑名経由で7日余りかかっていたのが、わずか4時間で到着できるようになった。これからは美濃や信濃から運送する貨物や木材と、名古屋方面からの貨物や魚・塩が水路を行き来し、櫓がきしむ音は日夜絶えないであろう」と述べている。式典が終わると数十隻の舟に来賓が乗り込んだ。2隻は楽人などが乗り、音楽を奏でながら舟は下って行き、名古屋都心の納屋橋に到着した。西岸にある料亭「得月楼」(後の鳥久)で祝宴を張ったと記録されている。

舟は犬山から木津用水・新木津用水・八田川を経て、庄内川を横断して黒川に入り納屋橋に至るルートで運航された。途中には味岡の清流亭(現:小牧市岩崎、廃業)、高山橋(現:春日井市高山町)、花長(現:春日井市花長町)、清水(現:名古屋市北区清水五)に船着場があった。

黒川の船着場(現:北清水親水広場)

明治20年に愛知県内にあった車両は、大中小車が4万8083台、牛馬車が149台なので、大八車での輸送がほとんどだ。狭くて未舗装の道路を、大八車や牛馬車で輸送するのに比べ、動力のない小舟といえど愛船㈱の輸送は非常に効率的であった。

愛船㈱による輸送は、23年9月から翌年6月までの10か月間で、次の実績をあげている。

・乗客:5,000人　・丸石:30万個　・薪炭:5,750俵
・米、麦、肥料:25,000俵　・氷:60万貫(2,250トン)
・材木:25,000本(30cm角で長さ3.6mの木材に換算)

丸石は木曽川の河原の石で、建築材料だ。家の柱を乗せる礎石や石垣に盛んに利用された。

氷は木曽川の河原などで作られた天然氷である。

犬山橋より上流の木曽川は川底が岩礁であるが、この岩の窪みに渓流の水を竹の樋で引いたり、川岸に田のような区画を造りそこへ渓流の水を入れた氷場で凍らせた。氷の厚さが6㎝以上になると、48㎝角に切って、貯蔵業者に販売した。貯蔵業者は氷室と呼ぶ施設でこれを保存し、暑くなるころ名古屋へ向けて出荷したのである。犬山にある日本モンキーパークの東に「氷室」という地名が今もある。

今も残る氷場の跡　可児川下流自然公園内

明治から大正の頃子供だった古老の思い出のなかで一番残っているのが、黒川を氷を積んだ舟が通ると、橋の上から「氷を投げて」といってせがんだことだという。清水の船着場で、氷の陸揚げを行っていたことを覚えている人もいた。

薪炭や材木など山間地帯ならではの貨物も多い。犬山と名古屋を結ぶ水路を造って舟を通し活性化を図るというもくろみがみごとに成功したのである。

明治40年頃まで活発な輸送が行われていたが、鉄道の整備により徐々に利用が減り、大正13年に営業を止めている。